連載■農と食の現場でPART9

農業や福祉とつながり「絵本の里」を創る人たち

ルポライター 滝川 康治

人口約4700人、農業が基幹の剣淵町で「絵本の里づくり」が始まって6年。リゾート開発などによる他力本願の地域おこしが醜い実態をあらわにするなかで、「絵本・福祉・農業」の三位一体ですすめられる自前の町づくりが光る。

「創ろう会」に心強い応援

「絵本まつり」のイベントが行われた3月19～20日、わたしは久しぶりで剣淵町を訪れていた。

JR剣淵駅の近くに「絵本の館」がある。ここは、戦前の旧役場庁舎を改修したもので、国内はもちろん世界中の絵本約1万3千冊が並んだ図書館、知的障害をもつ人たちの福祉施設・西原学園が運営する喫茶店、住民が文化活動にいそしむ公民館――という、3つの機能を備えている。館内では絵本セミナーが開かれており、70人ほどの町民が集まった。若い母親や西原学園の園生たちの姿がめだつ。

「長い物差しで考え、子供たちが『絵本の館へ遊びに行こうぜ』と言えるような場であってほしい。ただ、難癖をつければ本が足りないんじゃないか」(日本で初めて子供の本の専門店をつくった三輪哲さん)

「剣淵が文化の発信地になるよう、わたしたちもお手伝いしたい。大人のための図書室も一緒にあると、さらに拡がっていく。原画は倉庫にしまわず、できるだけ外に出そう」(東京の児童書編集者・鴻池守さん)

「(里づくりを担う人たちが)親父ばかりだったので驚いた。『昔は絵本じゃなく、エロ本だった』と言う人が中心なのが面白い。動く人がいっぱいでパワーを感じる」(名古屋市内で子供の本の専門店を営む増田喜昭さん)

里づくりの拠点になっている「絵本の館」は、戦前の役場庁舎を改修して4年前にオープンした

「絵本の里の応援団」を自認する講師の人たちが、次々に提言する。夜には、応援団のひとりでシンガーソングライターの小室等さんのコンサートも開催され、セミナーを盛り上げた。

里づくりを担うのは、農民や主婦、商店主、団体職員らで構成する「けんぶち絵本の里を創ろう会」(高橋毅会長・約300人)。その中心は30～40代のおじさんたちである。発端は88年2月、商工会青年部の町づくり講演会での、銅版画家・小池暢子さん(士別市在住)の言葉だった。

「日本人は人の心や文化を大切にしない。だから金を持っていても、世界の人たちから軽く見られてしまう」

何か光るものを感じた男たちが、小池さん宅に押しかけて話し込んだ。

そんななかで出会った東京の編集者の、「剣淵は絵本の原画美術館を建てるのにふさわしいところ」のひと言が、里づくりを決意させる。4カ月後には「創ろう会」を旗揚げと、行動は迅速だった。当時は、中心メンバーの頭のなかには、町を売り込むことしかなかったらしい。

各地から応援団の人たちが訪れて剣淵を語った「絵本セミナー」

里づくりと「大地の会」

安全な農産物の産直に取り組む「剣淵・生命(いのち)を育てる大地の会」(池田伊三男会長)は4年前に発足した。「絵本の里」のイメージにふさわしい、無・減農薬栽培で命の源となる作物を生産しつつ、食べ物の価値を消費者にアピールしたいというのが、会員25農場の願い。「クレヨン」「天の川」などの愛称を各農場につけている。

産直を手がけていた西原学園の販路を分け合う形でスタートして、今では20品目近い農産物や加工品を道内外の自然食品の会社や個人に販売中。収益の一部は里づくりに充ててきた。

「15年ほど前、有機農業を説く先輩に出会って自分の畑でも取り組んできたけれど、量と採算のバランスがうまくいかなかった。里づくりが始まって2年目に、西原学園の横井園長(当時)が無農薬栽培の話を聞きにきたのがきっかけで、『絵本の里にふさわしい面白い農業をしたいね』となった」

赤トンボ農園の主で、水田9haと畑6haを作る会長の池田さん(45)が、発足したころを振り返る。

最初の3年間は同学園内に事務局が置かれ、職員や園生たちが作業に協力してきた。初年度は800万円だった販売高は、93年度は1億円を超えるまでに急伸。最初は冷やかだった農協も「大地の会」の実績を認めるようになり、昨春からは農協の旧土壌分析室に事務局が移されている。

「僕が入会した一番の理由は、10年前に移動村づくり大学(注=北海道農業自立推進協議会主催の研修ツアー)に参加して、九州の消費者と食べ物の安全性について話をしたことが大きい。絵本の里と学園があっての会だし、三者一体でやっているからこそ、ここまで伸びてきたんじゃないか」

バレイショ生産部会長の江口敏広さん(46・一本松農場)が力を込める。

「大地の会」のパッケージは、会員の酪農青年と愛知県在住の絵本作家・木村昭平さんのデザイン。宅配するパッケージには、会の活動や農場紹介を載せたメッセージを同封しており、さまざまな反響が励みという。今年からは、特別栽培米の取り組みも始める。

「化学肥料や農薬を考えなくても、いいものが取れる田畑を1年でも早く作ることが、僕らの大きな夢なんです。異端児みたいな格好で始めたけど、最近の米の動向もあって、町内の生産者も興味をもっている。農業の先行きを考えたとき、この方向が絶対必要だし、できるだけ多くの人が絵本の里にふさわしい農業をやってほしい」

池田会長はこう言って、里づくりの一翼を担おうとする。

コンサートのあった夜、館の向かいの真新しい農業振興センターで開かれた「大地の会」の役員会を訪れてみた。総会に向けて、特栽米や土壌分析をめぐって熱心な討論が交わされ、農協のあり方にまで話題が拡がる。取扱高が大きくなったことで、よりち密な販売戦略が求められている様子をうかがわせる集まりでもあった。

地域とつながる障害者施設

社会福祉法人・剣淵北斗会が運営する西原学園(更生施設・定員50人)と

「大地の会」の役員会で今年の展望を話す会長の池田さん

北の杜舎（授産施設・同）は、里づくりとは密接な関係にある。

「創ろう会」副会長で、昨春オープンした北の杜舎の施設長・横井寿之さん（48）は、西原学園長になった84年以来、園生と職員が積極的に地域に出ていくことに努めてきた。「町おこしの拡がりが学園の発展につながる」が持論。わたしが、「絵本の里づくり」の理論的支柱だと思う人物である。

北の杜舎には農産加工科がある。農業者が生産して、入所者が加工を担当することで、互いに農業を振興していこう――というのが目的。去年は、ジュース加工をほぼ全面的に受託し、レトルトコーンもやった。冬場は、農協婦人部が味噌用の麹を作る。加工委託料が入所者の賃金になり、農業者がなかなかできないカボチャやバレイショなどの試作加工も手がける。

「数年後には、障害者が加工する本格的な福祉工場にすることが目標です。窯業科もあって、大型の窯も入れた。漬物をつくり、器は地元の粘土で大量に焼き上げるだけの設備があるので、農産加工～梱包という流れをきちんとつくりたい。農業者と連携していくことで地域に寄与することが基本的な役割だし、それを一番熱心にすすめているのが『大地の会』だと思う」

と、横井さんが基幹産業とがっちり結びついた施設づくりを説く。

館の喫茶店「らくがき」の運営、来町した作家らへ宿泊場所の提供、各種イベントの裏方…などと、絵本の里づくりには施設の入所者や職員が精力的に関わる。だから、町民の障害者への接し方もごく自然な印象を受ける。

「最初は（園生に）違和感があったけど、接しているうちに、『気を遣わなくていいんだ』と思うようになった。うちじゃアスパラの作業や秋の収穫期に来てもらっている。『大地の会』の半数くらいが援農を通じて園生とつながりがあるし、絵本の館に行くと相手が握手を求めてきたりするんです」

こう話すのは、「創ろう会」の理事で野菜を中心に13haの畑を作る鈴木文夫さん（41）だ。道路沿いの納屋の屋根には「てんとう虫農園」と書かれていて、ドライバーの目を引く。

「（里を軸にした）町おこしの究極の目標は、障害をもった人たちが安心して住める町になること。その活動にうちが積極的に参加することの楽しさ、新鮮さがある。そこに関心をもって、道内外から北の杜舎に就職を希望する若者も現れてきた。東京出身の女性職員が町内の農業者と結婚するし、滋賀県の信楽から来た職員は焼き物を推進している。こうしたことが将来、力になっていくでしょう」（横井さん）

応援団には、障害者とともに暮らす町であることに共感する人も多い。滋賀県内で障害をもった人たちと共同制作に取り組んできた画家の田島征三さん（東京都在住）は、91年夏の8日間、絵本の館をアトリエにして制作活動を行ったり、町の人たちと「夜な夜なトーク」を繰り広げた。このときに描いた原画は館に寄贈され、その後も田島さんは何度か来町している。

2年前に訪れたときに、

「ノーマライゼーションという言葉を知らなくても、住民が学園に出入りしたり、絵本の館で園生と接するなかで自然に、障害をもった人たちと一緒に地域づくりをしているんですよ」

と、横井さんが話していたことを思い出す。時の流れとともに、それが着実に浸透しているようである。

行政も積極的なサポート

その年に国内で出版された絵本のなかから、来館者が好きな本を投票して決める「絵本の里大賞」、原画展や手づくり絵本展、巡回文庫の活動…と、里づくりのすそ野は広い。3月の「絵本まつり」では、老人大学の人たちや剣淵高校の生徒、役場職員らがボランティアで裏方を支えていた。

行政側は絵本や原画の購入、収蔵館の建設、公民館の改修などに約2億円を投じたほか、年間2千万円ほどの里関連予算を計上しており、積極的だ。

「金は出しても口は出さない」が一貫した方針とか。愛知県からやってきたデザイナー専門学校の絵本科の学生を館に案内していた、大澤秀了剣淵町長に話を聞いてみると、

「初めは、役場のなかにも異論がありましたが、地元の若い人たちの意欲を伸ばすことは行政として大事だと思い、喜んで協力してきた。金額だけを見て、『農業がきびしいのに何だ！』との声も出たんですが、本や原画が残ったし、住民の着実な運動に変わっている。結果的に失ったものはひとつもありません」

と胸を張った。町は現在、市街地から6キロほどの桜岡地区に宿泊施設と温泉、コテージなどを造成中だが、ここを「絵本の里旅行村」と名付けて原画や絵本を見てもらう、館の支所のような環境づくりを進めている。

昔から、「剣淵の一村一品は土づくり」と力説してきただけに、「大地の会」などの試みにも、

「彼らの経済が成り立つようにすることが大事。（農産物に）毒が少ないだけに手間が余計にかかる。その分だけ高く買ってくれるよう、消費者に価値を認めてもらう運動を行政がやっていきたい」（大澤町長）

と協力姿勢をみせる。里づくりが始まるまでは剣淵は地味で目立たない町だっただけに、反響の大きさに面目躍如というところなのだろう。

活動の原点は「いのち」

初めのうちは、絵本を町おこしの手段にする〝不純さ〟に反発する声や、

「どうして絵本が経済に結びつくんだ？」という受け止め方もあったらしい。しかし、里づくりが7年目を迎えて住民の見方も変わってきたようだ。

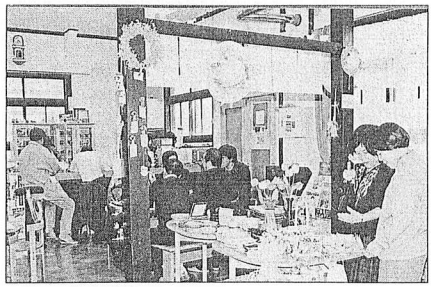
「何らかの形で関わる人がすごく増えてきて、セミナーにも常連の若いお母さんが来ている。これからは、『創ろう会』が組織としてきちんと自立し、草の根的にすそ野をどう拡げるかが課題でしょう」（横井さん）

ここまで事業が大きくなると、ボランティアに頼るのは限界がありそうだ。マネージメントや情報収集、企画調整の部分での〝助っ人〟がもっと必要な気もする。

2年前に剣淵へ移り住んだ児童文学者の加藤多一さん（59）は、自他ともに認める応援団のひとり。「里づくりは始まったばかり、これからが実体をつくる時期」と、次のように語る。

「絵本が子供の心を大事にすることからいえば、核や食品汚染の問題、子供の人権などに直接結びついている。国から表彰されて浮かれたり、（絵本の）美しさ、かわいさだけじゃ里づくりが駄目になる。その意味で、西原学園のハンディのある人たちや、無農薬農業の人たちがいて、土につないでくれている。生命の問題さえ放さなければ、面白い町づくりができると思う」

リゾートやゴルフ場、「自衛隊よ去らないで」コール、果ては核廃棄物施設…と、他力本願の地域振興をすすめようとする町がある。それとは対照的に、「絵本」をキーワードに農業と福祉が結びつき、心豊かな地域をつくろうとする剣淵町。そこに新しい農村文化が着実に脈打ち、町おこしのあり方について多くのことを教えてくれる。


西原学園が運営している喫茶店「らくがき」
（「絵本の館」1階で）

愛知の専門学校生を原画収蔵館に案内する大澤剣淵町長